

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査	明星大学教授	島田	博祐
委員	明星大学教授	石田	健太郎
委員	明星大学准教授	今野	貴之
委員	東京学芸大学名誉教授	大竹	美登利

申請者氏名 吉井 美奈子

論文題目 大学教育における倫理的消費者育成に関する研究－倫理的消費行動に及ぼす社会・心理的要因－

(論文審査の結果の内容)

1. 論文構成

本博士論文は倫理的消費の変遷や理論的・実践的側面を整理し、情緒的共感性やコールバーグの道徳的発達段階に合わせた女子大生の倫理的消費行動に影響する社会・心理的要因を明らかにすることを目的とした研究である。

論文構成としては、第 1 章の「倫理的消費の出現と展開」、第 2 章の「日本の学校教育における「倫理的消費」の扱い」の中で、「倫理的消費」の概念の歴史的変遷や理論的・実践的側面を先行研究に基づいて概観し、そこから以下の 3 つのリサーチクエスチョンを見出し、第 3 章以降の各章で順次、量的分析（因子分析・共分散分析など）・質的分析を用いて検証している。

<リサーチクエスチョン（以下 RQ と略）>

- ① 倫理的消費行動としての被災地支援は知産地消教育と連動して影響を与えているか
- ② 情緒的共感性が倫理的消費意識や行動にどのように影響しているか
- ③ 道徳的発達段階によって倫理的消費行動に影響する要素は異なるか

第 3 章「倫理的消費者概念再構築の必要性」においては、東日本大震災を事例として、日本における倫理的消費者としての行動に含まれる「被災地支援」に関する調査を行い、主に RQ①の検証を行っている。RQ②に関しては第 4 章「倫理観と倫理的行為」、第 5 章「若者の倫理的消費行動を規定する要因」、RQ③に関しては第 6 章「コールバーグにおける道徳的発達段階と倫理的消費」にて、大学生の日常生活における倫理意識・行為とインターネット情報倫理における意識・行為の関係性に関する質問紙調査、女子大学生の情緒的共感性や日常モラル等が倫理的消費に与える影響に関する質問紙調査を実施し、それぞれ検証を行っている。そして第 7 章「結語」において、前章までに得られた結論を概観しながら、大学教育における倫理的消費者育成に関する提言と授業試案を行っている。

2. 内容の評価

本研究の独創性、ストロングポイントとしては、(1) 従来あまり整理されていなかった日本の消費者教育における「倫理的消費者」の概念と特徴を諸外国と日本の歴史的変遷を辿りながら明確にした点、(2) 消費者教育と学校における道德教育・家庭科教育とのリンクを示し、各分野における意義を明示した点、(3) 実際の被災地支援の分析を通じ、地産地消教育や（被災地における）倫理的消費行動の実態を明らかにしたこと、(4) 大学生の情緒的共感性、日常モラル、コールバーグの道德性の発達段階、自尊心、社会への関心度等の心理・社会的要因と倫理的消費意識・行動の関係性について実証的研究により新しい知見を提示した点、(5) (1)～(4)の知見に基づき、今後の大学教育における倫理的消費者教育の提言を行ったことなどがあげられる。

但し本研究のウィークポイントとして、学位申請者自身も課題として指摘している通り、(1) 今回の RQ②③に係わる実証的調査は女子大生に限定されたことから、論題の大学教育全体としての把握をするためには属性や生活環境の異なる対象者への更なる調査が必要であること、(2) 今回は時間の関係から、要因分析とそれに基づく提言にとどまっているが、大学教育における倫理的消費者育成と謳うからには倫理的消費の意識を育てていく為の指導演、可能であれば大学以前の中等・高等教育からの学年・学校間を縦断した倫理的消費教育カリキュラムの検討も必要であることがあげられる。

(試験および試問の結果の要旨)

若干のウィークポイントはあるものの、それらは論文内容の問題ではなく、今後の課題として捉えられることであり、総合的に判断すると、今後の倫理的消費者育成のための教育を考えるための先駆的な試みとして高い評価ができると共に論文内容の社会的貢献度も認められる。

口頭試問でも質問に対し適切に対応し、博士論文として必要な基準を満たす内容になったと考えられる。

上記の点を踏まえ、博士論文審査委員会において本論文が博士（教育学）の学位を授与する価値があるかについて慎重に審査した結果、合格と判定し、本研究は博士（教育学）の学位を授与するに十分価値あるものと認める。